

CLOSE-UP EAGLES

VOL. 4

～OB&OG 紹介～ PART.2

今回 2 回目は OG の山口恵さん(33 回生)をご紹介しますと思います。

(*やまぐちではなく、やまくちです。)

今年から山口さんは、Xリーグ オービック・シーガルズでMGとして活躍中です。

齊藤(以下 S)ー宜しくお願いします。

山口(以下 Y)ー宜しくお願いします。

S:現在のお仕事を教えてもらえますか？

Y:自動車部品メーカーで人事をしています。今年で3年目になります。

S:MGなのに運動神経が凄いイメージが強かったけど、高校までのスポーツ歴を教えてください。

Y:小学2年から高校3年までバスケットを選手としてやっていました。

S:EAGLESとの出会いはどんな感じでした？

Y:野球部かアメフト部のMGをやりたいな、と思ってはいました。

S:バスケットは興味なかったの？

Y:バスケットはやりたくなってしまうので…。

野球部のMGは昔から憧れがあったのですが、組織的にアメフト部がしっかりしていたのでアメフト部を選びました。

S:勧誘された時に何か違うなって思った？

Y:アメフト部の説明会でMGの役割、チーム内の組織構成を聞いて『凄いな！』と思って、自分自身『ここに入ったら成長できるんじゃないかな？』と思いました。

S:在学中の何か思い出のエピソードはありますか？

Y:ん～、なんだろう。全てが楽しかったのが思い出ですね。

4年生の時、リーグ戦の時かな。

普通に授業中、グラウンドをボーッと眺めていた時に「何か、この時間が終わるって感じがしないね」って、話を同期のMGと話した覚えがあります。「この時間がずっと続くんじゃないかってかんじだよな。」って。

S:逆につらかった思い出は？

Y:4年生のリーグ戦で*成蹊大学に負けた後ですね。

チームの雰囲気が悪くなって、成蹊戦までの雰囲気は緊迫感があって、

自然に皆声が出ていて必死さが出ていたんですが、負けた2戦目で降参迫感が無くなってしまい、直さなければいけないと思い練習中やハドルでも言うんですけど、なかなかチーム自体が前に進まなかった事がつらかった思い出として残っていますね。

* VS 成蹊大学 14-17 敗戦 (2006 SEASON GAME)

S:なるほど。思い出の試合は？

Y:やっぱり成蹊大学戦ですね。負けた試合が思い出って変ですよ。(笑)

私自身、記録担当だったので、サイドラインで残り17秒にFGを決められた瞬間(場面)を今でも覚えています。

* 記録担当は、試合中チームエリア関係なく、25yd以上先に入れる。

S:EAGLESで学んだこと(得たこと)はありますか？

Y:私自身、周りに支えられて今があると思います。周りに対する感謝の気持ちをEAGLESの4年間で学びました。

S:そうそう。間接的に最初聞いてビックリしたんだけど、今年から社会人チームでMGを始めたけど、何かきっかけがあったの？

Y:卒業してすぐにやりたかったんですが、仕事の関係上出来なく、それでもXリーグの試合をたまに観戦に行き、「やるなら今しかない！」と思い、今

年からMGをやることになりました。

でも、結局アメフトが好きだったんですね。(笑)

最終的にはEAGLESにフィードバックしたいですね。

S:学生フットボールと社会人フットボールの違いってある？

Y:1プレー、1プレーに対する姿勢が必死。一人一人が試合前に取り組みをメールで回ってくるのですが、「最後の一步」「低く」等、基本的な事を多く挙げています。

それは、学生とか関係なく出来ることだと思うんですよ。意識次第で、その思いがどれだけ強いのか。本当にそれに対して、どれだけ真剣にやっているかって言うのが、多分『差』なんだと思うんですよ。

本人の能力もあるが、気持ちの違いが大きいのではないかな？と思います。取り組み次第だと思います。

S:メッセージを頂けますか？

Y:目標を持って取り組んで欲しいと思います。目の前の目標と言うよりも、例えば1年生であれば2年生〇〇さんではなく、4年生〇〇さんを目標にし、自分自身が4年生になった時、目標に達している。または越えている存在を目指して欲しいです。

XリーガーでもNFLの選手でも構わないと思います。常に上に向って頑張ってください。

それに向って、今自分がやるべき事は何かを考えながら頑張ってください。

S:今日はありがとうございました。

Y:ありがとうございました。

(H.21.8.31 発行)



山口恵: 33 回生 4 年時 MG リーダーとしてチームを支える。余談だが、運動能力の高さにはビックリさせられる。現在、X リーグ オービックシーガ
ルズの MG として奮闘中。将来は、その経験を EAGLES にフィードバックし
てくれることを期待したい。

INTERVIEWER 齊藤拓夫(25 回生)

